

# 愛しています 住みよいまち うるま

しまぶくとしお  
うるま市長(沖縄県) **島袋俊夫**  
Toshio Shimabuku



## うるま市の紹介

うるま市は、那覇市より東へ25km、沖縄本島中部の東海岸に位置しており、東に金武湾、南に中城湾の両湾に接している細長い市です。また、沖縄県内市町村の中でも有人の島が多い(平安座島、宮城島、浜比嘉島、伊計島、津堅島)のが特徴で、津堅島を除く4島とは、橋でつながっており、車での往来が可能となっています。(津堅島は連絡船で往来)

本市も、いわゆる「平成の大合併」によって、平成17年4月に、旧4市町(石川市、具志川市、勝連町、与那城町)が合併して誕生し、人口では那覇市、沖縄市に次ぐ県



上空から望む海中道路

内第3位の市となりました。

農業では、沖縄県の主要産物であるサトウキビをはじめ、い草(畳の材料)や津堅島特産のニンジンが県内有数の産地となっているほか、養豚業も盛んです。漁業では勝連地域でモズクの養殖が盛んで、全国でも高いシェアを誇っており、テレビ等でも多く取り上げられています。また、最近では金武湾域で全国的にも珍しい「ポルトガलगキ」の養殖に地元漁協を中心に取り組んでいて、将来的なうるま市の特産品になればと、大いに期待しているところ です。

産業面では、中城湾に面した埋め立て地(州崎地区)が、特別自由貿易地域として国から指定を受けており、国内をはじめ、海



世界遺産に登録された勝連城跡

外からの企業誘致を積極的に行い、本市の雇用創出と財政強化につながっています。

また、市内の史跡である「勝連城跡」が、平成12年12月に「琉球王国のグスク及び関連遺産群」として世界遺産に登録されました。本市では、勝連城跡一帯をうるま市の文化・観光産業の拠点と位置付け、「勝連城跡周辺文化観光拠点整備事業」において、急ピッチで整備を進めています。

## 趣味の闘牛観戦

うるま市は、県内でも特に「闘牛」が盛んな地域です。私の地元でも周りで牛を飼っている家が多く、私も小さいころから闘牛に触れてきたこともあって、今でも闘牛観戦が趣味の一つになっています。本市では、県内でも唯一の屋根付、全天候型の「石川多目的ドーム」があり、春・夏・秋の年3回「全島闘牛大会」という主要な大会を含め、年間約20回の大会がこの石川多目的ドームで開催されています。開催時は、施設収容人員数いっぱい(3000人)を超える観客が訪れる、うるま市を代表するイベントになりました。私もよく観戦に訪れますが、牛と牛が向かい合う時の息遣いや勝負どころでの迫力に、毎試合ハラハラドキドキしながら楽しんで観戦しています。

これまでは、闘牛は男性の趣味というイメージでしたが、最近では女性も多く観戦に訪れるようになりました。特に、「闘牛女



会場の熱気伝わる闘牛大会の様子

このように、古くから盛んな闘牛をさらに盛り上げるべく、うるま市では、本年7月に闘牛を市指定の文化財に指定しました。これを機に、闘牛をさらに盛り上げるべく、うるま市としても積極的にアピールしていきますので、皆さん、うるま市にお越しの際はぜひ観戦して欲しいですね。

子」闘牛カメラマンの久高幸枝さんが、SNS等で積極的に闘牛の魅力を発信していることも大きな影響かなと思います。また、うるま市内の有志を中心に立ち上げたプロジェクトで、闘牛をテーマにしたヒーロードラマ「闘牛戦士ワイドー」が沖縄県内で放送され（主題歌を歌っていたのはあの「HY!」、大きな話題になりました。放送が終わった後も、県内各地のデパート等で闘牛戦士ワイドーが登場するイベントを積極的に行っていて、子どもたちの人気者になっています。

## わが家の新しい家族

子どもたちが独立して、家に妻と2人になったときにやって来たのが、甲斐犬の「カイ」君。今年に入って、知り合いを通じて遠く山梨からやって来ました。

生まれてすぐわが家に来たこともあって、最初は少しオドオドした様子で、私も妻もどのように接すればいいか、手探り状態から始まりました。

しかし、日が経つにつれ、「カイ」も自己主張するようになると、私たちに甘えん坊なところを見せるようになりました。朝と夕方には散歩をしたいと思います。

吠えるようになり、夜中には、私たちにかまってほしくて、庭から家の玄関に向かって吠えるようになりました。最初は合図をしなかったのですが、あまりに吠えるので仕方なく夜中に玄関を開けると、安心したのか、ぱったりと吠えるのをやめて、甘えてくるんです。人の気配が恋しいのか、今では、玄関先が「カイ」の寝床になっています(笑)。



筆者の帰りを迎える「カイ」

した。本当に手のかかる子どものようですが、おかげさまで、すくすくと成長しています。夕方や週末には、私の畑に連れて行くのが日課で、私が畑仕事をしている間、邪魔することもなく畑中を走り回っています。日ごろは、家においても公務のことが気になることも多かったのですが、「カイ」と接している間は「カイ」のことばかり考えてしまっているので、そういう意味では、いい気分転換になっています。今となっては、「カイ」はわが家に来るべくして来た「運命」だったのかなと思うようになりました。